地域社会へのインクルージョンと暮らしの場

デンマークとスウェーデンにみる障害のある人たちの住まいと暮らし

薗部 英夫

要旨 平和と人権保障を基礎としたノーマライゼーションは，北欧・デンマークのバンク-ミケルセンが提唱し，スウェーデンや北米に広がり，1981年の国際障害者年を牽引，21世紀の障害者権利条約につながっている．日本ではノーマライゼーションは「脱施設化」として入所施設の解体が強調される傾向が強く，同年齢の市民と同等の生活条件をつくる，他の者との平等な住まい，暮らしの場をつくる方向での政策化が弱かった．本稿では，1993年以降，16度にわたる北欧の視察から，大規模入所施設のグループ住宅群への変容，地域のネットワークで支える小さな町のモデル，特別なケアのある多様なグループ住宅，そして高齢者住宅の近年の動向などの視点で，障害のある人びとの住まいと暮らしについて論じ，北欧におけるノーマライゼーションとインクルージョンの具現化の現実から，日本の現状と重ね合わせて考察した．

キーワード 北欧のノーマライゼーション，インクルージョン，障害者権利条約，グループ住宅，暮らしの場

はじめに

1993年以降，16度にわたり北欧の小さな町を訪問しながら，私はノーマライゼーションがどのように実現しているのか，地域社会のインクルージョンはどのように展開されているのかを見て，聞いて，日本の現状と重ね合わせて考えてきた．そうした経験から得た現時点での結論の一つは，障害者権利条約（2006年国連総会採択）で確認された同年齢の市民と同等の「あたりまえの暮らしの場」を実現するためには，「施設定員の削減」のみの数値目標だけでなく，障害者の暮らしの内実と財政に裏付けられた総合的，かつ抜本的な施策の具体化が必要ということだ．

この間日本では，ノーマライゼーションは「脱施設化」として理解され入所施設の解体が強調されてきた．同年齢の市民と同等の生活条件をつくりだすこと，他の者との平等な住まい，暮らしの場をつくるという視点は弱かった．デンマークやスウェーデンでは，1960年代からノーマライゼーションの運動によって，大規模な入所施設ではなく，より小規模で，自由やプライバシーが守られた「特別な住まい（家）」が保障されてきている．それは「居住空間」だけに留まらず，住宅改造，補助器具や支援機器などの環境整備，「特別なニーズと配慮」を実現する人的資源確保のための法制度が整えられている．以下，これらの国々の障害のある人たちの住まいと暮らしについてみていきたい．

そのべ ひでお
全国障害者問題研究会副委員長・日本障害者協議会副代表

1 大規模施設“田舎町スーロン”の今

1）「ここは最後の恐竜だ」（2001年）

デンマークのスカネボー自治体にある大規模施設＝「田舎町スーロン（Landsbyen Solund）」（**写真1**）．町の人口は3万人．氷河の跡の湖や沼が多く，その湖の畔，東京ドーム5個分の25haという自然公園のようなところにグループ住宅棟が広がっている．

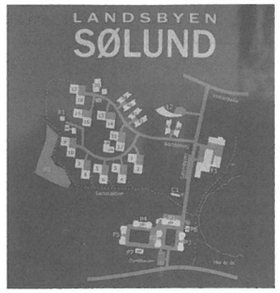

写真1 スーロン全景

写真2 共同住宅棟が14ある

写真3 乗馬の風景

2001年，初めてスーロンを訪問した際，施設長のアイエンダールから次のように聞いた．「デンマークで残った大規模施設は5つある．ここが最大．“最後の恐竜”だ．大規模施設は解体される．しかし，けっして消えてしまうことはない」「スーロンに長く暮らしている人たちは重い自閉症や知的障害の極めて重い人たちだ．同じような人どうしで，それぞれの可能性を見つけて暮らしていくことを望んでいる．プライバシーは守られ，緑の自然がある」．

施設全体の真ん中にある棟の地下には温水プールがあり，住人たちが楽しそうに泳いでいた．隣には，スタッフの筋力維持・増強のためのトレーニングルームもあった．外には，野生のリスが駆け，羊や七面鳥が放し飼いにされている．週末は近隣の市民が集う自然公園でもある．

2）2012年春：グループ住宅棟はどんどん増えた

2012年，2回目の訪問．迎えてくれた施設長は若いロネに代わっていた．公募で選ばれたという．

素敵なデザインで快適なバリアフリーの共同住宅棟がどんどん増えていた（**写真2**）．65歳になる盲ろうの女性の住まいを見せていただく．彼女は，温水プールも乗馬も楽しむそうだ（**写真3**）．それができる圧倒的なスタッフ体制に驚く．

「スーロンは国の障害者問題の研修センターでもあり，研究者12人が活動しています」「ここは住居なので，プライバシーがある．安心感をもって暮らしていける環境がある」「でも，どうしても閉鎖的になるので，町の人がなるべくここにやって来るよう，夏至祭の頃には大きな焚き火の2万人の音楽会の会場になります」．

10年ほど前に施設長から聞いた絶滅する“最後の恐竜”状態から，スーロンは何が変わったのかと彼女に質問した．

「ノーマライゼーションの流れの中で，“大規模施設は止めよう”と入所施設や精神病院を解体しました．スーロンも20年前には廃止が決まっていました．でも，居住している知的障害の重い人たちの大半は，町中での独りでの生活は難しい．そのことを理解してもらって，廃止は撤回，存続することになりました．その後，スーロンはどんどん充実してきたのです」．

3）2014年秋：専門的なケアの継続性を保つ

2014年，3回目の訪問．当時，スーロンには18歳～92歳までの重い知的障害のある235人が暮らしていた．スタッフは700人（生活支援員や看護師が550名，医師や作業療法士（OT），理学療法士（PT）等，医療チームが40人など）．

ベテランの副施設長トリーネが言った．「新人スタッフには，年4回，それぞれまる1日，外部専門家による講習会があります」「相談者がついて14日ごとに，話し合いをもっています」「労働組合でも講習会を開いていて，①安心できる，②価値が共有され愛されている実感，③他者に愛情を感じられる，④仲間と感じられる，ことをポイントにしています」．

さらに「なによりも安心感は自尊心の向上につ